みんなで

のりこえよう通信

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校長室から

令和　2　年　4月　17日　　NO.5

野村克也

　プロ野球の開幕も不透明な状態が続いていますが、昔、堺の中モズに球場があったことを覚えている人も少なくなりました。

「秀鷹寮(しゅうほうりょう)」と呼ばれる南海ホークス(今のホークスの前身)の2軍の寮もありました。

この秀鷹寮の近くで生まれ育ったのですが、昼間から野球のユニホ－ムを着てガタイのいいおじさんたちがグルロ－ブやバットを持ってうろうろしている。

「働かなあかんで」なんて幼心に思っていたりしましたが、プロ野球の選手たちだったのです。

明治生まれの祖母の自慢話です。

祖母の家は、食事付の下宿屋を営んでいました。毎朝、毎夕大量のお味噌汁やおかずを作っていました。

まだ、小さかった私は、下宿していた大学生とよく祖母の作った夕食を食べていました。

祖母が言うには、あるとき、体の大きな若い子が、排気口の下で鼻をくんくんさせています。

「なにやってんや」と祖母が聞くと、はにかんだ様子で立ち去ろうします。排気口からは夕食の味噌汁のにおいが飛び出していました。

「兄ちゃん、めしと味噌汁とたくわんぐらいしかないけどええか」というと、その体の大きな青年は、飛び上がるように喜んで、ついてきました。

「そりゃ、もうよう食べたがな」と嬉しそうに祖母は語っていました。

その青年が、後の野村克也監督だったのです。

祖母の一番の自慢話でした。